

3.“かなは易しい”というのは迷信だ

挨拶は感情の交流

朝、おうむを見たら、「オハヨウ」と言いました。犬は、「ワンワン」といって尾を振って近寄りました。

さて、あなたは、このどちらに、朝の挨拶

ㄋ ㄋ ㄋ

部首 方

耕作に使う“すき”の象形字。今は“方法”（読み方、書き方の方）という使い方と“四方”（四つの方角）という使い方と“四角”という使い方が多く、本義には全く使われない。

【防】 ㄋと方との会意形声字。ㄋは崖のしるしの部首なので、“四方を崖で囲む”という意味。つまり外敵から守るための土手を周囲に築いて“ふせぐ”こと。

【訪】 “あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしてたずねる（言）”こと。

【放】 人と女との合字。女は手に棒とか鞭を持った形なので、“棒をふるって人を追いはらう”こと。

を感じますか。おうむの「オハヨウ」にですか。それとも、犬の「ワンワン」にですか。

おうむの「オハヨウ」に、朝の挨拶を感じる人もあるでしょう。それは、「オハヨウ」というおうむの声から、聞く人が、人間同士の挨拶を感じ取るためです。しかし、その声を出したおうむ自身は、その声に、なんの意味も感情も託しておりません。耳に聞いた限りでは、私たちの交す挨拶と同じですが、中身は全く追っています。

これにひきかえて、私たちは、ふつう、犬の「ワンワン」に、ずっと挨拶を感じるはずです。犬と私たちとの間には、「ワンワン」という声を仲立ちにして、立派に感情の交流が行われるからです。

一年生が論語を読む

「とも、えんぼうよりきたる。またたのしからずや」

この文を一年生に読ませたら、おそらく、私たちが読むのと同じように、立派に声に出して読むでしょう。

ところで、あなたは、これを、「文を読んだ」と言いますか。私は、そうは言いません。なぜかと言いますと、それはおうむの、「オハヨウ」と同じように、言葉の働きがないからです。これに反して、

「友、遠方より来る。また楽しからずや」

という文ですと、石井学級の一年生は、「トモ、エンホウヨリクル。マタタシカラズヤ」と、読むでしょう。「遠方」という言葉は習いませから、正しい読み方は出来ません。また、「来る」も「きたる」とは読めません。

しかし、「友だちが、遠くの方から来る」という前半の文章の意味は、間違いなく読取ることが出来るのです。「エンホウ」「クル」……読み方こそ間違っていますが、意味だけは正しく読取っているのです。

前者が、おうむの「オハヨウ」なら、後者は、犬の「ワンワン」に当ります。私は後者に価値を認めます。言葉が生きて、立派にその役目を果しているからです。

「読める」とは

読むとは、「意味を汲取る」ことにあります。例えば、声に出して読ませますと下手ですが、よく文意を理解できる子供がいる半面、いわゆる読み方はうまいが、いっこうに文意の読取れない子供がいます。私たちは、もちろん、後者よりも前者に価値を認めています。

しかし、外見だけでは、意味を読取っているかどうかは、判りません。そこで、止むなく、耳に聞いて判る声だけを手がかりにして、すらすら読めれば、「よく読めた」と考え、つかえつかえ読むと、「よく読めな

い」と、考えるわけです。事實は、必ずしもそうではないのですが、そう考えるより仕方がないわけです。

ところが、人は、うっかりすると、目的の意味よりも、手段の声のほうを大事に考えるようになるのです。つまり、うまく声に出して言えれば、「うまく読めた」と、本当に考えてしまうのです。

論より証拠、かな書きの「源氏物語」や、漢字が一つも使われていない「土佐日記」は、決して易しくなどありません。しかし、その中の言

ㇿ ㇻ ㇼ

部首 畠

畠は畠で、“りっぱな酒どっく”の形を象った字。部首としては“りっぱな財産”の意味に使われることが多い。

【富】 畠と家(宀)との合字。りっぱな酒器のあるような家は裕福であるところから“とみ”を表す。

【福】 畠と神(礻)との合字。“神様から授けられたとみ”という意味の字。目に見えない精神的な財産。

【副】 財産(畠)を二つに分(刂)けるという意味。刂は刀の変化した形で、部首としては“切る”こと。沢山ある財産を二つに分けて、片方は万一に備える“予備”“ひかえ”の意味。

葉を、漢字に改めさえすれば、もっとずっと判り易くなると思われる言葉がたくさんあります。

かなが易しいというのは、五十音を学べば、どんな文でも読める、と誤解しているからです。まったく浅はかな考えと言わざるを得ません。こういう人は、おそらく、ローマ字を学べば、英語やフランス語が、読めたり、書けたり出来る、と考えるのではないのでしょうか。ローマ字がどんなによく読めて書けても、英語やフランス語が、読めたり、書けたり出来るようにはなりません、漢字は、読めて書ければ、国語も読めたり、書いたり出来るようになるのです。同じ“字”という名が付いていても、漢字とローマ字の働きは全く違うことを、はっきりと認識しなければいけません。

漢字で読取る言葉の意味

二年生の教科書に、「れっ車、はっ車、はくせん」という言葉が出てきます。ふつうの学校では、これをどう教えているのでしょうか。

かな書きされたこれらの言葉は、教えなくても、声に出して読むことは出来るでしょう。しかし、意味は解りませんから、教えなければなりません。

そこで、教えるわけですが、「れっ車」と「はっ車」では、字形も読み方も互いに似ていて、どちらがどうと区別することが大変に困難です。第一、意味を理解することが難しいし、覚えにくいので、「れっ車」を「はっ車」と間違えたり、「はっ車」を「れっ車」と間違えたりすることがあるほどです。

ところが、私の学級では、「列車、発車、白線」という形で習います。子供たちは、この字を見ると、

「**列**は、一列二列の列だな。並んでいる車のことかな。『れ**っ**しゃ』と読むのかな」

というように、自分独りの力で、意味や読み方を考えます。だから、「れ**っ**しゃ」ではなく、「れっしゃ」と読むのただとだけ教えれば、それで済むのです。

「はくせん」では、読めても意味は解りません。そればかりか、それが、「白い線」であることは、教えても、なかなか解るものではありません。

ところが、「白線」では、子供たちは、「しろせん」と読んで、自分の力で、意味を知ります。そこで、私は、

「しろい線のことを『ハクセン』と言うんだ。白は、『ハク』とも言うんだよ」

と教えますと、

「先生、ぼく解ったよ。運動会の紅白玉入れの『ハク』がそうでしょ」と言うのです。

このように、漢字で指導していきますと、教えなくても、意味を正しく知ることが出来、その上、言葉を早く覚えて、早く使えるようになります。そして、何よりも価値のあることは、子供たちが、「自分で考える」という態度を養ってくれることだ、と私は思っています。

私が、受持っていた学級には、一年生の一学期を終っても、一文書のひらがなも読めるようにならなかった子供がいます。こういう子供は、私の十年間の小学校生活でも、ただ一人です。

この子は、ひらがな書きされた自分の名前を見ますと、

「これはぼくの名前だ」

と言います。しかし、その中のかなのどれかを取り出して、「この字はなんという字？」

と尋ねますと、もうだめです。

「解らない、解らない」

の一点ばりです(この子は、入学前に一年間、幼稚園教育を受けており、自分の名前だけは解るようになっていたのです)。

ところが、漢字のほうは、三十二字も覚えてしまったのです。かなは

一文字も覚えられなかったけれども、漢字は、指導要領に記載されている一年間の目標を、一学期で覚えてしまったのです。

私は決して、漢字だけを特別に指導することはしません。文章に即して、かなと同じ程度に指導するだけです。

㊦ ㊧ ㊨

部首 復

古い字形は𠄎で、𠄎は、二つ重ねたような形をした酒器の象形。𠄎は、止(足の裏の象形)をさかさにしたものの変形。復は復の本字で、“同じ道を重ねて行く”“𠄎が“重ねる”、𠄎が“歩く”。今では復は、𠄎つまり“重ねる”という意味。

【複】 “布を重ねて作った着物(ネ)”。夏の着物「ひとえ」は複衣に対して単衣と書く。今では単をシングル、複をダブルの意味に使うことがある。また衣類に関係なく広く“重なり合う”“こみあう”としても使われる。

【腹】 “肉体のなかで、最も多くの器官が重なり合っているところ。“はら”には腸が重なりあっているから。

簡単な字形のものほど難しい

ところで、この子供の覚えた漢字の中には、数字は、「一」と「二」があるだけで、「三」以上の数字はありません。しかも、この

「一、二」が読めたのは、一学期を終える直前だったのです。入学二か月後の6月10日のテストでは、「雨・雲・雪」や、「車・花・畑」などの複雑な漢字は読めるのに、「一、二」が、どうしても読めなかったのです。

私は、子供に字を書かせ始めるのに、この「一、二、三」から始め、たびたび、繰返し練習させたものです。それは、この字の書き方は、一番基本的なものを備えているからです。「左から右へ」筆を動かし、「上から下へ」筆が及んでいきます。

ある時期には、毎日、この子の手を取って、

「さあ、一、二、三という字を書こうね。そら、イチ、ニー、サン。棒が三本あるから、これは『サン』という字だよ。解ったね」とこういう練習を何回繰返したことでしょう。ところが、一学期が経っても、ついにこの、「三」が読めずに終わってしまったのです。

こういう子供の例は、私も初めてですが、「七」や「八」の覚えにくいことは、もう十年も前からよく経験しています。「七」を「ハチ」、「八」を

「シチ」、または「ク」と読む子供は、今までにも実に多くいました。これは、これらの数字が抽象的なものであり、字形と何の結び着きもないからです。字形がどんなに簡単であっても、意味と結び着かなければ、記憶にならないわけです。

私は、「一、二」ほど易しい字は世の中にない、と今まで思っていました。けれども事實は、「車・花・畑」のような具体的な内容を持った字よりは難しかったのです。これが解ったのは、この子のお蔭だっと思えます。

さらに、この難しい漢字よりも、かなのほうがまだまだ難しいことが解ったのも、この子のお蔭です。一学期を終えて、一つのかなも覚えられなかったという、この事実です。

これは、意外のようでいて、よく考えてみれば、少しも意外なことではありません。かなは、どんな抽象的な漢字よりも、ずっと抽象的なものだからです。